第１０期　第３回小平市農のあるまちづくり推進会議議事録

１　開催日時　令和６年１０月２２日　（火）　午後３時００分～午後５時００分

２　場　　所　小平市役所　６階　６０１会議室

３　出 席 者　委　員：出席９名、欠席３名
　　事務局：出席３名

４　内　　容
（１）　開会挨拶
　　相原会長による挨拶
（２）　第２回会議の検討内容について
　　第２回の協議内容について事務局から報告
（３）　今後の活動の方向性の決定と課題整理について
　　→協議内容については下記に記載する
（４）　その他

以下、協議内容

【今後の活動の方向性の決定と課題整理について】

事務局より、前回の会議の検討内容について報告した。このことを踏まえて、消費者へ農業の現状や取り組んでいる内容をどのように伝えていくか等について協議し、意見のほか、新しい提案を募った。

【消費者へ農業の現状や取り組んでいる内容について】

・　収穫量が少ないことにより出荷される農産物の価格が高いと感じる。一方、出荷されるダイコンは大変美味しく、里芋も続々と出回り始めている。夏に限ると、暑さが年々上がっていて、農家が大変苦労されているように思う。また、暑さによって気温の状況を見て作付けされているのか、例年よりも秋野菜の出荷時期が変化していると感じているが、今のところ食材を使うという面では苦労していることは特にはない。
・　小平市の一部農家では西洋野菜を流行らそうと頑張っているので、そういった違いも味わって貰えたら嬉しい。
・　カリフローレやスティックセニョールなどの新しい野菜をＰＲしていきたいということだが、市民の方を巻き込んで広報していく必要があると思う。また、特に若い農家はこういった野菜に熱心にチャレンジしているので、是非消費者には召し上がって頂きたい。
・　先日、市外の駅内の店舗で小平市と北海道小平町の「Ｉ Love 小平フェス」が行われており、小平市立第八小学校の６年生が考案したお弁当が売られていた。こうした子どもたちのアイデアで出したものが提供されれば、小平の農産物が消費者にもっと楽しく感じられると思う。
・　苗が天候不順により不良となった分、蒔き直ししなければならず、種苗費はかかってしまうが、出来上がった作物にその分を価格転嫁できるかと言えばそうではないのが現状である。
・　天候等の影響で農家が苦労していることも消費者の方に知ってもらい、農作物が少ない

ことや価格が上がることに納得してもらえるような伝え方をしていくことが大事だと思う。

- 農作物を第一次生産品とするならば、それを加工したりする飲食店はその一次生産品が値上げすると、加工品もその値上げ分を上乗せせざるを得ないため、消費者が購入してくれない可能性がある。これは今の経済情勢では解決が難しい課題だと思う。しかし、農業振興という面で見れば、価格の問題というのは非常に重要な点でもあり、是非農産物の価格転嫁に繋がるような広報していければと思う。
- どの組織・団体にも共通してお願いしたいが、欲しい野菜がいつでもあるとは思わないでほしい。また、いつどれくらいの量が欲しいかが分かっていれば作付けしやすい。その情報も連作障害などの関係から前作から考えないといけないため、１年半前には欲しい。
- 消費者も「これが欲しい」というこだわりを持つよりも、買いに行った時に店頭に並んでいる旬の農産物を適量買うのが楽しい消費の仕方だと思う。そのため、小平産の農産物を使ったお弁当の献立を作る中で、「これを使いたい」というこだわりを持つ必要がないと思うようになった。ただ、農家の方々は採れた農産物が採れた分だけ全て売れるわけではないので本当に大変だと思う。
- 農家が一番野菜を出したいときに出せるような仕組みが重要だと思う。練馬区や東村山市はアプリケーションを使って直売所や旬の農産物をＰＲしている。
- 農家も「今日はこの農作物のみ」として消費者の動きを誘導していくのも１つだと思う。また、直売所に並ぶ農産物を楽しみにしている消費者向けに収穫できた農産物を販売することに加え、学校給食やイベントで必要な農産物は計画的に作付けしていくようなことも必要だと思う。
- 小平市内の農家の実情を知って、農家の力になりたいと思ったが、消費者にできることはあるのか。私の家からだとＪＡ共同直売所が遠く、なかなか足を運べない。
- 知り合いに農業のパンフレットなどを広めて貰うことも良いと思う。
- 市場への出荷は経費が掛かるうえ、価格も自分で決めることができない。一方で、庭先直売所は出荷の経費がかからないので安く販売できる。加えて、売り切れたら直ぐに収穫して再度販売もできるためメリットも沢山あり、是非直売所で農産物を購入してほしい。
- 農産物への価格転嫁の話も出ているが、労働時間や施設の減価償却費、資材費などの生産コストに見合った収入があるかといえば、ほとんどの農家はそうではない。先祖代々受け継ぎ、次の世代に繋いでいきたいから、農家という生き方を選んでいる。

５　次回開催（第４回）

令和７年１月２８日（火）午後３時００分から